

鹿児島大学附属図書館貴重書公開

旧制鹿児島  
高等農林学校の

底力



鹿児島大学附属図書館

## はじめに

鹿児島大学附属図書館は、平成9年から貴重書公開展を毎年開いてきましたが、今年は本学農学部の前身である「鹿児島高等農林学校」に関する文献資料の公開展示を開催いたします。あわせて鹿大法文教育学域法文学系（法文学部）の丹羽謙治教授による「文献資料から見る鹿児島高等農林学校」と題する講演会も行います。鹿児島高等農林学校は日露戦争後の明治41年に南方資源の開発を目的として設立されました。これは官立の高等農林学校としては盛岡高等農林学校に次ぐものでした。そのキャンパスは地元鹿児島県から寄附された鹿児島市荒田村の5haに整備されましたが、ここは現在の鹿大郡元キャンパスや鹿児島市立病院、鹿児島市交通局となっているものです。

当附属図書館には、鹿大農学部附属図書館から引き継がれた高等農林関係の膨大な資料が収蔵されており今もその整理が行われていますが、これらはいずれも南九州から台湾などの農業開発の歴史を研究する上での貴重な資料となり研究者に利用されています。

本年は鹿大附属図書館中央図書館が設立された50周年にあたります。この節目を記念するにふさわしい貴重書公開展の開催にあたり御協力を賜った皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。

平成27年11月

鹿児島大学附属図書館長 野呂 忠秀

## 目次

鹿児島高等農林学校の成立	1
鹿児島高等農林学校関係年表	2
教育と研究	
1. 教育	3
2. 資料の収集と展覧	4
本学中央図書館所蔵の『ゲオーポニカ』	5
3. 研究	6
校長・教授列伝	7
高農三大事件	9
行啓幸 貴顕の訪問	10
地域の中の「高農」	11
昭和6年『木脇藤次郎日記』に見える高農	11
鹿児島大学に残る「高農」	12
主要参考文献一覧	13



(吉田初三郎「鹿児島市鳥瞰図」(部分)昭和10)

# 旧制鹿児島高等農林学校の底力

法文教育学域法文学系  
教授 丹羽 謙治

本学農学部の前身である旧制鹿児島高等農林学校は、明治41年(1908)、二番目の官立高等農林学校として、湿田の広がる鹿児島市郊外の「荒田」の地に設立された。以来、ここで数多くの農業技術者や研究者が養成されてきた。

今回の展示は、農学部、附属図書館、総合研究博物館に所蔵されている文献資料を中心として、高等農林学校における研究や教育、教官と生徒、地域とのつながりなど、その具体相を明らかにすることを目的に企画したものである。今年、郡元キャンパスに隣接するたばこ産業(JT)の跡地—都市計画で割譲する前は高等農林の土地であった—に、鹿児島市立病院、交通局が移転してきた。地域の大学としてグローバル化と地域創生という二つの課題が求められる昨今、新たな未来を模索、展望するためにも、鹿児島高等農林学校の歴史を振り返ることは意味のあることだと考えたのである。ささやかな展覧会ながら高等農林の底力を堪能していただければ幸いである。

企画・編集段階で多くの方々にお世話になった。この場を借りて厚く御礼を申し上げる次第である。

なお、本文の中では鹿児島高等農林学校を「高農」と略称することがあることをお断りしておきたい。

## 鹿児島高等農林学校の成立

日清戦争以降、文部省の産業教育政策は工業教育優先のもとに置かれており、農業教育の振興は大きく立ち後れていた。ところが、日露戦争を経て、国際社会での経済競争に肩を並べるための実務的な技術者を大量に養成し、また、輸出拡大やアジア進出という国家の政策課題の遂行に必要な人材を養成することが強く求められるようになった。他方、地域の農業課題に即した専門教育・研究機関の設置を求める地方の産業資本家や、文化の発展を求める地方政治家が、学校新設を求める新しい社会的な力として動きはじめていた。

台湾を領有し、日本の国力ならびに民族が外に向かって大いに発展する気運を察し、九州農会は九州に高等農林学校を設置して、熱帯植物栽培利用法を研究する旨の建議を行った。鹿児島県出身で、当時盛岡高等農林学校の校長であった玉利喜造(のちに初代校長として迎えられる)は、鹿児島県出身で、当時文部大臣であったまきののぶあき牧野伸顕とともに、第二高等農林学校の鹿児島誘致運動を展開した。鹿児島県もまた、創設経費約22万円のうち、10万円を寄付し、その後、約1万円と土地約16,000坪を追加したのである(「開校式玉利校長式辞」)。

こうして明治41年(1908)、鹿児島高等農林学校が「南方開発を使命」とし、「南方発展の教育方針」に立つ教育を目指す学校として創立された。玉利校長は開校式式辞のなかで「南方経営暖熟地方農業の研究は内地にては当位より他に最適の場所之あらざれば」「地の利天の恩恵を利導して国家隆昌の一要素たる覚悟あらざるべからず」と述べた。

すなわち、上からの国家的な政策課題の実現に必要な人材養成の高まりと、地方からの(下からの)教育要求の高まりとが結びついて創立された学校であったといえよう。(佐藤)



高等農林学校本館と講堂



開校当時の講堂

## 鹿児島高等農林学校関係年表

年号	西暦	事項（高農関連）	事項	校長
明治41	1908	3月、高等農林学校設置。		玉利 喜造
明治42	1909	9月、第1回入学式。		
明治43	1910	2月、本館落成。	大逆事件、韓国併合	
明治44	1911	11月、講堂竣工、同月23日新嘗祭挙行。		
大正3	1914		1月、桜島大爆発 7月、第一次世界大戦勃発	
大正5	1916	学年開始を4月にする。 7月、唐湊果樹園開設。		
大正6	1917	5月、農学会設立。10月博物同志会設立。 11月、農書展覧	ロシア革命	
大正7	1918	10月、指宿植物試験場開設。	シベリア出兵 第一次世界大戦終結	
大正8	1919	11月、開校10周年祝賀式。	日本、南洋諸島などを 統治下におく	
大正9	1920	3月、皇太子（後の昭和天皇）行啓。 この年から高農の大学昇格運動おこる。		
大正11	1922	6月、吉村清尚校長就任。 11月、蔬菜デー（生産物即売）始まる。		吉村 清尚
大正12	1923	5月、久邇宮邦彦王訪問。 6月、同窓会報「あらた」創刊。	9月、関東大震災	
大正14	1925	11月、玉利初代校長胸像除幕。	4月、治安維持法公布	
昭和2	1927		3月、金融恐慌	
昭和4	1929	5月、御大典記念献穀田設定。開校20周年。		
昭和5	1930	城山登山道建設反対運動（～昭和6）		
昭和6	1931	4月、玉利初代校長逝去。	9月、満洲事変	
昭和9	1934	11月、開校25周年記念式典。		
昭和10	1935	4月、草野嶽男校長就任。校長排斥運動。 11月、昭和天皇行幸。		草野 嶽男
昭和11	1936	9月、草野校長退任、小出満二校長就任。		小出 満二
昭和12	1937		3月、満洲国建国	
昭和13	1938	4月、谷口熊之助校長就任。		谷口熊之助
昭和14	1939	7月、風車を撤去、供出。開校30周年。		
昭和15	1940	2月、紀元二千六百年奉祝式。		
昭和16	1941		12月、真珠湾攻撃	
昭和18	1943	学徒戦時動員体制確立。		
昭和19	1944	4月、鹿児島農林専門学校と改称。	8月、学徒勤労動員令	
昭和20	1945	6月鹿児島大空襲。本館をはじめ大半の建物が焼失。9月、学校再開。 11月、三浦虎六校長就任。	3月、学校授業停止 8月、敗戦	
昭和24	1949	5月、新制鹿児島大学設立。		三浦 虎六

# 教育と研究

## 1. 教育

### 学科構成・カリキュラム

鹿児島高等農林学校は明治41年(1908)、南方資源の開発・農林業振興の指導者たるべき人材の育成を目的として設立された。開校時の学生は、農学科31名・林学科28名、選科生3名であった。

約30haの学校敷地には農場・植物園が設けられ、校外にも高隈演習林・佐多農林実習場、種子島牧場、唐湊果樹園、指宿植物試験場などの広大な付属施設を備えた。昭和6年(1931)には、大正3年の桜島大爆発後の耕地化研究のため桜島溶岩実験場が設置されている。

学科は、当初の農学科・林学科に加えて、大正9年(1920)に養蚕学科が新設され、翌年には農学科から農芸化学科が独立、さらに農学科は二年次より農学一般(第一部)と農芸生物学専修(第二部)とに分かれた。昭和14年(1939)には獣医学科が設置されている。大正9年からは修業年限1ヵ年の農学別科(昭和4年まで存続)・林学別科(大正11年まで存続)も置かれた。各学科とも実験・実習を重視し、とくに精神訓育と勤労を重んじた。

昭和19年の鹿児島農林専門学校への改称・改組をへて、昭和27年3月の学校廃止までに得業生(高農では「卒業」とは言わず「得業」といった)は40期、本科4,410名、別科204名、専修科55名を数えた。



実験の様子

### 実習(調査報告書)・得業論文

高農では実践を重んじる教育方針のもと、学科と実験実習は時数も成績評定も対等に扱われた。各学科では演習林や牧場のほか、実際の農村・農地などで多岐にわたる実習が行われた。あわせて各学科・各年次に日数・目的地など定められた実習旅行も実施された。たとえば、農学科では一年生は県内往復3日間(佐多実習場)、二年生は往復6日間(九州東西両沿岸地帯を毎年交互)、三年生は3週間(台湾・朝鮮もしくは国内)の見学旅行が課題であった。

各学科とも、とくに三年の大旅行は、3週間から1ヵ月と期間も長く、目的地も日本本土のみならず、台湾・朝鮮・樺太・満洲・南洋諸島にまで及び、実習のほかに学校のPR、就職、卒業生との連絡に大きな役割を果たした。

これらの成果として、調査報告「作物調査」「農村調査」、旅行報告「佐多旅行報告書」「宮崎大分方面旅行報告書」「西部九州旅行報告書」「夏期実習旅行報告」、実習記録「農場実習日誌」「担当地設計書・報告書」などが現存している。

### 「農村調査」

農学科第一部と養蚕学科の三年生は、各自で調査地を選定した地誌「農村調査」の作成を得業試験の一部として課せられた。内容は、地勢・地質、気候、運輸・交通、町村勢、土地(制度・面積)、農業経営、主要作物・家畜・副業、生産物取引、代表的農家、年中行事のほか、神社仏閣・名所旧蹟・農業先覚者・風俗習慣・方言・俗謡などの実地調査で、大正元年(1912)～昭和24年(1949)に作成された615点が現存している。統計資料にはあられない聞き取りや観察による調査成果は興味深く、当時の地図や写真なども添付されており、大正・昭和前期における農村実態調査として貴重である。

### 「得業論文」・「夏期実習旅行報告」

農芸生物学専修の農学科第二部では、動植物の採集標本製作や、学内の博物同志会での研究発表を通して研鑽を積み、三年になると研究テーマが与えられ、実験・論文指導を受けて得業論文を作成した。得業者には農業・動物・植物の中等教員無試験検定資格が与えられ、大学卒業者や農学博士の学位取得者も輩出している。三年の夏期には教官指導のもと10日間の採集旅行のほか、大旅行(台湾・満洲など)もしくは実習旅行(官公庁・試験場・民間の大農場など)に赴き、成果として夏期実習旅行報告を提出している。

(上村・橋本)



学生による調査報告・論文

## 2. 資料の収集と展覧

ここに高農が発行した23頁の小型の冊子がある(図版)。表紙には「大正六年十一月九日／陳列農書目録／鹿児島高等農林学校図書館」とあるものの、前書もなく何の目的で開催された展覧会なのかこれだけでは判らない。実はこの展示は、大正6年(1917)11月8日・9日の両日、鹿児島県立図書館(当時は現在の鹿児島県民交流センターの敷地にあった)で開催された日本図書館協会九州支部総会に合わせ高農で企画されたものであった。会議のために来賓したのは、同協会総裁の徳川頼倫侯爵(紀伊徳川家当主)、会長の和田萬吉東京帝国大学図書館長、九州各地の図書館長たちである。島津隼彦男爵初め鹿児島の名士も多数来賓として招かれた。翌9日は午前の会議の後、史蹟の視察が行われ、その一つが高農の「古書展覧」であった。一行30余名は、車で高農に向かい、昼食の後、玉利校長の案内で農書を堪能した。



『大正六年陳列農書目録』  
(鹿児島大学附属図書館)

大正6年は戊辰戦争戦没者の五十年祭の年に当っており、明治維新から五十年の記念事業として、この時期、県立図書館で大規模な展覧会の準備が進められつつあった。そのため、この図書館協会の催しが高農図書館で行われたものと推定される。高農の威信をかけて集め、展示された農書は全261点720冊に及ぶ。ほとんどが江戸～明治の日本の農書であるが、西洋翻訳書11点、朝鮮書3点、中国書24点を含んでいる。



『農業全書』全10巻(明治15年刊)  
(鹿児島大学附属図書館)

数もさることながらその多様さには驚かされる。農業全般にわたるものは勿論、茶、菜種、人参、煙草などの作物、本草に関するもの、養蚕、牧畜、築庭にまで及んでいる。また、有名な宮崎安貞『農業全書』でも元禄版・天明版・文化版・改定版(図版)と、刊行や摺刷年次の異なるものを努めて展示することを心がけている点も注目される点である。



『成形図説』巻31  
(鹿児島大学附属図書館)



『大嶽便覧』(小出満二の筆写)  
(鹿児島大学附属図書館)

現在、鹿児島大学附属図書館に継承されているのはその一部(38点、約15%ほど)に過ぎない。当時の県立図書館の蔵書目録に見える書籍とも一致しないので、展示品の多くは高農の教官一重松達一郎、小出満二、谷口熊之助ら一の個人蔵書が集められたのではないかと推測される。当時の図書館主事は蔵書家としていられていた小出満二教授である。晩年の発言ながら小出自身「西洋と日本とシナと朝鮮と琉球の代表的な農書は揃えてあるよ」と語っていたという(飯沼二郎「小出先生との一日」)。小出らの常日頃からの農書の収集の努力がこのような大規模な展覧を可能にさせたものと思われる。

現在、附属図書館には小出や谷口熊之助が筆写させた写本類が残されているが、上記の展示のために行ったものか、大正5、6年に写したものが多い。『銘酒原醕秘法』『草綿種子撰秘法』『牧馬法』などは小出が本草学者として著名な織田完之の蔵本を写させてもらったもの（図版）。『筑前土産志』は谷口が博多の田尻氏の蔵本を謄写した本である（図版）。鹿児島県関係では、大正5年に小出が『南島雑話』（大島島庁本を木脇啓四郎が写したものを転写させ、大正6年には『徳之島事情』を「得業生堀口市蔵氏の斡旋により著者吉満氏の稿本を借りて謄写」させている。この他にも種子島の豊山文庫の『御家記』『懐中鳴記』、志布志の『志布志旧記』など農書以外にも及ぶ。上記展示の後にも、鹿児島県立図書館に入ったばかりの写本類（田原陶猷『宇藩産物考』『宇和島領内採薬紀行』『伊豫宇和島鑛山採集』、『鳥賞案子』など）を写させていることが注目される。（丹羽）



『草綿種子撰秘法』  
（鹿児島大学附属図書館）



『筑前土産志』  
（鹿児島大学附属図書館）



『南島雑話』  
（鹿児島大学附属図書館）



バリントン『The history of New South Wales』（1802年刊）  
（鹿児島大学附属図書館小北文庫）

### 本学中央図書館所蔵の『ゲオーポニカ』

2006年夏、中央図書館の司書の方から内線の電話をいただいた。お話によると農学部伝来の多数の書籍が段ボール箱に入った状態で図書館に所蔵されているという。そのうちの一書籍の価値が、その内容を含めて不明なので鑑定してほしいとのことであった。

聞くとおとちれば、その書籍はギリシア語やラテン語で書かれているらしく、タイトルはジオポニカらしいとおっしゃった。ジオポニカ、もしゲオーポニカのことであるとすれば、それはわが国にあるはずはないと思った。鑑定をして驚いた。正真正銘『ゲオーポニカ』だった。しかも1781年リプシアエ（ライプチヒ）で刊行されたNiclas版だった。言うまでもなく、世界的に見ても大変希少な本で、まさに稀覯本中の稀覯本であった。話に拠れば、農学部前身の鹿児島高等農林学校（高農）の蔵書だったとのこと。つまり、高農から本学農学部を経て本学図書館に伝来したものであった。高農の図書目録には大正2年（1913）入手の記載はあるものの、入手経路は不明とのこと。本を実見してわかったことであるが、タイトルページに高農の蔵書印が押してある。ゲオーポニカとは「農業に関すること」、すなわち「農事」という意味である。



高農にこの本を伝えた人はこの本がどのような本であるか理解していたことになる。だからこそこの本は高農に伝わったのである。高農の底力たるや並大抵のものではなかったと言えよう。（伊藤）

### 3. 研究

高農では、大正3年1月の桜島の大噴火直後には降り積もった火山灰が作物にどのように影響を与えるかが実験されている。農学・林学・養蚕学・園芸化学の各分野で、さまざまな調査・研究が行われたが、ここでは高農における文理融合型の研究を二例紹介することにした。

#### 谷口熊之助の情報収集

大正7年(1918)の初春に、教授の谷口熊之助は蘇鉄そてつに関して書面による調査を実施した。蘇鉄は南九州が北限とされるが、現代と異なりその分布状態を調べるのは決して容易なものではなかった。谷口熊之助が採用した方法は、主に南九州から沖縄にかけての各地の大小の営林署、郡役所、農事試験場などに蘇鉄に関する質問状を出し、同封の封書により回答を送付してもらおうというものであった。

質問の内容は次のようなものであった。

- (1) 蘇鉄の一般的な呼称
- (2) 自然生蘇鉄の分布、主産地
- (3) 多く栽培する地方
- (4) 栽培農家の割合
- (5) 栽培目的
- (6) 葉・幹・実の利用法
- (7) 雄雌鑑別法
- (8) 栽培上の雄木・雌木の利害
- (9) 管下にある著名な大木の有無とその所在地
- (10) 蘇鉄澱粉の利用法
- (11) 澱粉原料としての雄木、雌木の優劣、雌木の幹と実との優劣
- (12) 蘇鉄澱粉の一般名称
- (13) 観賞用矮小蘇鉄の産地と名称
- (14) 純蘇鉄畑の有無
- (15) 蘇鉄にまつわる伝説

上記の質問に対して、最も早いものが2月13日付の沖縄県産業課、吉成安任の回答書(図版)で、8月と遅れて提出された例もあるが、概ね2月から4月にかけて回答が寄せられている。現存するのは25通ほどである。

これとは別に、東京帝国大学農科大学の本多静六(農学博士)から寄せられたものもある。谷口は、『大日本老樹名木誌』の著者で林学の大家である本多に蘇鉄の名木を尋ねたようで、本多はノートを破って回答をしたためた。

交通機関が十分整備されていない状態の中で、郵便を通して現地の状況を予備的に把握しようとして行ったこの調査だが、高農の得業生(卒業生)が各地にいたことも大きかったと思われる。

蘇鉄の研究は、吉村清尚の化学的成分分析研究と統合され、西田孝太郎(高農教授、のちに農学部長)に受け継がれ深められていった。(丹羽)

#### 内藤喬の民俗植物研究

植物病理学を専門としていた教授、河越重紀は、鹿児島県各地をくなく歩いて、植物標本を作成するとともに、植物の系統的な分類を行った。昭和5年に河越が没すると、その薫陶を受けた内藤喬が後を継いで同研究室の教授となった。内藤は植物採集の現地調査に訪れた土地々々で、古老や農夫ら呼び集めて、植物の「方名」(その土地での呼び名)や、使用方法、料理法、伝説などを聞き取り、小型のノートに記録していった。また、知人や学生から方名を聞く場合には実物標本を添えて提出させたという。このような努力の結晶が、『鹿児島県植物方名集』と遺稿『鹿児島民俗植物記』である。昭和32年、内藤は沖縄での植物採集中に急死する。柳田国男が、「生前記録していた民俗関係のものについては紙片たりとも失わぬように」と遺族に手紙を送った話は有名である。アララギ派の歌人でもあった内藤は、高農の「校友会報」に採集旅行や実習先で詠んだ短歌を掲載している。植物に対するだけでなく、ことばに対する愛が研究の土台にあったのである。(丹羽)



『そてつ (あらた叢刊第二冊)』  
(鹿児島大学附属図書館)



そてつに関する回答書  
(鹿児島大学農学部蔵)



遺稿『鹿児島民俗植物記』部分  
(鹿児島大学附属図書館)



## 校長・教授列伝



初代校長 玉利 喜造  
(1856 - 1931)

鹿児島生まれ。明治8年(1875)上京し、津田仙の学農舎農学校に学ぶ。駒場農学校農学科(第一回)卒業。明治18年から二年間、アメリカ留学。帰国後、東京農林学校教授。明治32年、農学博士(第一号)。明治36年1月、盛岡高等農林学校の初代校長となり、続いて明治42年(1909)5月、鹿児島高等農林学校の初代校長となる。大正中期、文部省が専門学校の大学昇格の方針を打ち出すと、断然、鹿高農の大学昇格運動に邁進した。大正11年(1922)2月に貴族院議員に勅選され運動は収束に至った。

教育方針は農林業の技能習得の徹底に加え、パイオニア精神、人格教育を重んずるもので、「紳士」の養成をめざした。各種博覧会委員、帝国農会特別議員、鹿児島県教育会副会長、薩摩義士顕彰会々長などを務め、産業界・教育界の重鎮として活躍した。(丹羽)



二代校長 吉村 清尚  
(1870 - 1958)

福岡県生まれ。明治28年(1898)東京帝国大学農科大学卒業。福岡県立農事試験場に技師として十年間勤めた後、明治38年盛岡高等農林学校教授。同42年～45年、文部省在外研究員として渡欧。帰国後、鹿児島高等農林学校教授に転任。初代玉利校長の後を受けて、大正11年(1922)6月より昭和10年4月まで校長を務める。専門は肥料学で、特に生物の有機塩基に関する研究。学究肌で、校長の業務を終えるとすぐ実験室に籠ったという。著書に『最新肥料学』『生物栄養化学』など。

退官後、多年の研究を『生物有機塩基の研究』としてまとめたが、戦災により原稿が焼失、多くの有志の支援を受けて、昭和31年(1956)に刊行された。(丹羽)



三代校長 草野 嶽男  
(1881 - 1963)

鹿児島市生まれ。専門は園芸学。東京帝国大学農科大学卒業後、岩手県農会の技師を務める。明治43年6月、鹿児島高等農林着任。2年後、フランス、アメリカ、マレー半島を巡る。アメリカ、アリゾナ州ナツメヤシ試験場から種子を乞い、ヤシ類を鹿児島や指宿に植える。大正8年(1919)指宿植物試験場長。玉利校長が目指した温泉熱を利用した野菜の促成栽培に成功、栽培法を確立して、指宿地域の地場産業の確立に大きな貢献をした。昭和10年4月、三代校長に就任。しかし、同窓会や学生から反発を受け、就任1年半で文部省へ転出した。昭和30年11月、第6回南日本文化賞を受賞。(丹羽)



四代校長 小出 満二  
(1879 - 1955)

兵庫県生まれ。明治39年東京帝国大学農科大学卒、翌年、同大助手。明治43年5月、農業教育、植民政策研究のためドイツ、イギリスへ留学。大正2年帰国し、翌3年より鹿児島高等農林学校教授。大正7年から9年にかけて、オーストラリアに出張。この間、実業家の北村寅之助の資金援助により、オーストラリア、太平洋、東南アジア関係の洋書、地図類を収集(鹿児島大学附属図書館「小北文庫」)。帰国後、大正11年から文部省督学官(兼、鹿高農講師)。昭和3年から九州帝国大学教授(兼、文部省督学官)。昭和11年4月より13年4月まで四代鹿高農校長。昭和20年12月まで東京高等農林学校長(兼、九州帝国大学教授)。没後、教え子らによって『農学・農業・教育論 小出満二著作集』(農山漁村文化協会)が編纂、刊行された。(丹羽)



五代校長 谷口 熊之助  
(1883 - 1956)

愛媛県生まれ。明治41年東京帝国大学農科大学卒、同44年同大学院修了。明治45年2月鹿児島高等農林学校教授。専門は農芸作物、熱帯農学。ドイツ語も教授した。高農の農場と実習精神を形作った教授のひとりと言われる。また、山茶の研究、大蔵永常(江戸時代の豊後の農政家)の研究は有名。大正8年12月、英、米、仏、及び蘭領印度へ留学。小出満二とは肝胆相照らす仲で、同じ校長の職にある者同士、親しく情報を交換していた様子が、小出が送った書簡類から窺える。普段、学生と同じ詰襟を着用し、時に奇抜な発言があったといい、昭和13年4月から20年11月まで五代目の校長を務め、戦時中は神風が起るといって日本の勝利を最後まで説いたという。(丹羽)



講師 田代 安定  
(1857 - 1928)

安政4年(1857)、加治屋町に士族の子として生まれ、柴田圭三の私塾で仏語や博物学を学ぶ。明治5年(1872)に造士館に入学するとともに助教となる。8年に内務省雇、15年には農商務省よりキナ樹(キニーネの原料)試植の命を受けて沖縄を調査。17年、ロシアの万国園芸博覧会に派遣され、北東アジアの植物学研究の先駆けとなったマクシモヴィチのもとに留学。ロシアの学士会会友となり、皇帝より叙勲。18年に帰朝するや海防を論じ、八重山を調査して再三建議するも容れられず農商務省を辞す。

日清戦争を機に台湾研究に志し、樺山資紀の激励を受ける。28年に陸軍省雇員として澎湖島に渡り、各地を調査して伊能嘉矩と台湾人類学会を結成。35年には、西郷従道の台湾出兵の場となった恒春半島に恒春熱帯植物殖育場を開く。明治44年から大正5年にかけて鹿児島高等農林講師。南西諸島・台湾・南洋の人類学・植物学に大きな足跡を残しつつ、昭和3年帰郷の際に心臓発作で逝去。翌年、高等農林時代の教え子を代表して松崎直枝が渡台、蔵書を整理して台北帝大に寄贈した(台湾大学「田代文庫」)。著書が数点、長男安民の名で寄贈され本学図書館に残されている。(鶴戸)



『恒春熱帯植物殖育場事業報告』  
(鹿児島大学附属図書館)

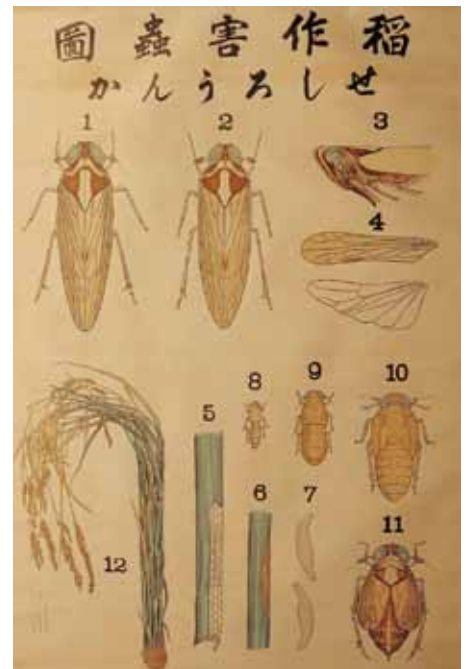


教授 岡島 銀次  
(1875 - 1955)

高農創立当初の教授陣の一人で、昭和11年(1936)に至るまで教鞭を執った。専門は昆虫学・動物学である。福井県出身で、東京帝国大学農科大学卒業後は、陸軍砲兵となり日露戦争に第九師団第五補助輸卒隊長として従軍している。その後、東京高等農学校講師、東京帝国大学農科大学附属農業教員養成所講師などをへて、高農教授に就任した。

堂々とした偉丈夫で寡黙の大教授といわれ、厳しさと温厚寛容を備えた人格者として学生からも慕われた。実務面にも長け、養蚕学科の設置に手腕を発揮したほか、南洋研究・海外発展を志す学生による「函南会」や、「博物同志会」などの課外活動を主宰、指導した。学外でも県内の中等・高等学校教員や同好者らと「鹿児島博物学会」を組織し、大正15年(1926)から高農退職まで会長をつとめた。同会は、鹿児島の動物・植物・鉱物の調査研究・教育に関するさまざまな活動を行い、また機関誌「郷土博物時報」を発行して郷土の自然に対する関心を高め、理科教育の向上を図った。昭和5年(1930)には、鹿児島市城山の国指定史跡・天然記念物とするための運動も行っている。

(上村・橋本)



掛図『稲作害虫図せしろうんか』部分  
(鹿児島大学附属図書館)



教授 重松 達一郎  
(1868 - 1940)

愛媛県生まれ。明治25年(1892)東京帝国大学農科大学卒業後、岐阜県技師、岐阜県立農学校長、山梨県立農林学校長を経て、同38年9月広島高等師範学校教授となる。この師範学校時代に、同僚の中目覚からエスペラント語を学び、広島エスペラント倶楽部設立に参加する。明治42年(1909)年8月、高農に転任。寮監、校友会の副会長を務める。専門は作物、品種改良で、多くの水稻の品種を育成した。中でも水稻高農35号、雄金糯が有名で、昭和初年広く栽培された。大正14年9月に退官したが引き続き講師として学生を教えた。著書に『稲穂論』(明治35)。仮名文字論者であり、鹿児島でエスペラント語の普及に努めた。「韓国のフェアブル」と呼ばれた昆虫学者、石宙明はその薫陶を受けた一人である。旧高農図書館蔵書の中には「重松達一郎先生記念圖書」の印が押された和書が確認できる。(丹羽)

# 高農三大事件

高農の歴史の中で地元と中央を巻き込んだ大きな運動があった。教官のみならず、卒業生や生徒が積極的な関与をしたことが注目される。

## 大学昇格運動

大正6年(1917)九州農科大学を新設する方針が打ち出され、九州では宮崎を除く6県が誘致運動を展開した。9月24日には東京の日比谷公園松本楼で大会を開催した。しかし、文部省はすでに福岡への設置を決めており、運動はいったん終息した(大正8年4月、九州帝大に農学部設置)。

大正7年12月に大学令・改正高等学校令が公布され、それに基づき、9年4月に東京高等商業専門学校が初の官立単科大学、東京商科大学に昇格した(慶應、早稲田もこの年、初の私立大学となる)。同年5月、東京高工学・神戸高商・盛岡高農・鹿児島高農・秋田鉦専の5校昇格案が新聞紙上で取り上げられると、東京・広島の高師学校が猛烈な昇格運動を展開、結果、盛岡・鹿児島・秋田の3校は昇格の候補から外れることになった。これに対して、12月1日、高農同窓会は急遽大会を開催して運動を開始、生徒も3日に大会を開き、代表委員が陳情書をもって上京、教官も岡島教授が連名状と学生の退学願を携えて上京した。

8日には照国神社で県民大会が開かれ、県内各地で出張演説、提灯行列も行われ、運動は県民を挙げての熱を帯びたものになった。東京では県選出の代議士や県出身者たちにより、要路へ働きかけが行われた。各地で行われた激しい昇格運動により他校の昇格も一時見送られ、結局高農「悲願」の大学昇格は実現せずに終わるのである。(丹羽)

## 城山道路問題と高農

鹿児島市の城山は、西南戦争の最後の激戦地であり、鹿児島の人々にとっては父や祖父の戦った特別な場所であった。加えて人の手が加えられていない自然林が多く、博物学的にも重要であると考えられていた。大正6年(1917)には県の史蹟名勝記念物調査会—小出教授らがメンバー—は、鹿児島市の管理がずさんであるとして市に対して反省を促す意見書を提出している。

昭和5年(1930)7月、当時の樺山可也鹿児島市長は在郷軍人会の協力のもと、観光に役立てるため城山に自動車道路を建設するという計画を発表した。その建設の際、古木の楠を伐採することが含まれていたため中央を巻き込んだ建設反対運動に発展していった。

昭和6年1月になると岡積<sup>おかづみ</sup>勇輔<sup>ゆうすけ</sup>を中心とする敬天<sup>けいてん</sup>舎<sup>しや</sup>の人々が「城山傷かんとす 魔城人なきか」という漢学者塩谷温<sup>しほのぐち</sup>の言葉を合言葉に反対運動を展開、それに高農の岡島銀次教授が会長を務める鹿児島博物学会、鹿児島林学会などが反対の声明を出した。鹿児島博物学会は1月16日に長文の反対意見書(図版)を発表。1月24日には県立図書館での博物学会例会は聴衆が400名に達した(鹿児島新聞)。一方、市でも現地で説明を行ったり、楠の伐採数を減らすよう変更をしたりして理解を求め、文部省にも陳情書を提出した。

文部省は脇水鉄五郎を派遣したが、結局、工事差し支えなしという結論に達した。在郷軍人会では、2月11日に起工式を行い、人海戦術で3月上旬に完成させた。

しかし、反対派の運動を受けて、文部省は、史蹟名勝天然記念物保存法により城山(の北東部)を「天然記念物・史跡」に指定することとし、事実上、建設された自動車道路は一般車の乗り入れができなくなった。6月、県立図書館では指定を記念した「城山植物展」が開催された。(丹羽)

## 校長更迭事件

鹿児島高等農林は盛岡高等農林に比べ、研究分野での立ち遅れが目立っていた。昭和10年4月、草野嶽男は第三代校長に就任すると、老教授の更迭を行い人心の刷新を図ろうとした。これに対して、卒業生や生徒が猛反発、校長排斥運動に発展した。一部の学生はストライキも辞さない構えを示すほどで、小出満二が谷口熊之助宛ての手紙(5月5日付)で「新校長も誠意を以て熱心努力の意気込と存候、ただ十分の理解を得難き様子にて卒業生には不穩の空気張り居る由」と語っているような状態になっていた。その後、安藤廣太郎(西ヶ原農事試験場長、農学博士)が調停に入り、校長を文部省督学官として欧米視察に赴かせることとする案を提案、問題の三人の教授へは説得を行い鎮静化を図った。結局、草野校長は昭和11年9月、文部省督学官として欧米に赴き、代わって小出満二が校長に就任、岡島・川島・萬年教授が退官して漸く事態が収拾された。(丹羽)

## 行啓幸 貴顕の訪問

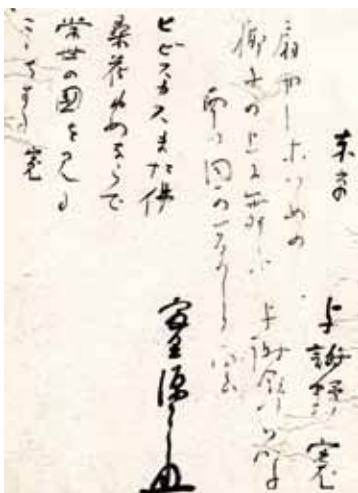
- 大正9年3月26日 午後4時14分より30分間、皇太子(昭和天皇)の行啓があった。高農本館の二階、林学、博物学、農学各標本室を台覧の後、左側西端の一室より、敷地の全体と麦の中耕の様様をご覧になった。この部屋には献上品として日本の統治領になったばかりの南洋諸島の宝貝の標本と、宮古島の貝類、蘇鉄の盆栽などが並べられていた。ついで、講堂に展示の博物標本、南洋の生産物などをご覧になった後、講堂玄関前(現在の鹿児島大学正門左奥)にイチヨウを植樹された。
- 大正12年5月19日 久邇宮邦彦王は、妻侘子(島津忠義の娘)、皇太子との婚約が決まった良子女王(香淳皇后)、その妹の信子女王を連れて里帰りを兼ねて鹿児島を訪問。その第三日目、5月19日の午後4時30分より25分間、邦彦王が高農を訪問。吉村校長の案内で博物標本室を見学、岡島、米山、草道、谷口各教授より標本の説明、野草展覽会場では内藤助教授が草花について説明を行った。良子女王、信子女王ら女性たちは女学校(一高女、二高女)に回り、高農へは足を運ぶことはなかった。
- 昭和6年3月30日 小松侯爵夫人一行、高等農林学校見学。小松侯爵夫人薫子は、玉里島津家第二代当主忠濟の二女で、長男彰久、次男豊久も同行。薫子らは母の田鶴子と共に、墓参のため帰省、3月26日より4月4日まで鹿児島に滞在(田鶴子と末娘の量子は9日まで)。なお、この年の11月19日、天皇が鹿児島を訪れた際、歩兵第四十五連隊練兵場(鹿児島市下伊敷)において中学以上の学生が親閲を許された。
- 昭和10年11月17日 鹿児島・宮崎県下の陸軍特別大演習に併せて、昭和天皇の高農への行幸が8月1日に決定、3か月半にわたり細心の注意を払って準備が進められた。到着は午前9時。教授・名誉教授の拝謁、本校の校務の概要説明ののち、4名の教授の研究実績と研究品、および巨大な「鹿児島県鳥瞰図」(書記の白濱重寛作—農学部長室に現存)が天覧に供された。天皇はお手植のイチヨウをご覧になったあと、植物園・農場へ移動、生徒の実習の様様を「御野立所」(全生徒が1か月半かかって築いた高さ6メートルのシラスを固めた土台)から御覧になった。全1時間の、予定よりも10分長い滞在であった。行幸決定から準備段階、当日の様様に至る詳細な記録が『行幸記念誌』としてまとめられている。



行幸に臨む岡島教授(左)と内藤教授  
(鹿児島大学附属図書館)



「鹿児島県鳥瞰図」と現農学部長の岩井久教授



芳名録の「与謝野鉄幹・晶子」  
の署名部分  
(鹿児島大学総合研究博物館蔵)

扇やしなつめの 椰子の上に舞ふ 南の国の夏のしら雲	東京 与謝野 晶子
ヒビスカスまた佛 桑花ゆめならで 常世の国を見る こゝちする 寛	宮里源之丞

(翻刻)

附属施設である指宿植物試験場には、大正末年から多くの見学者が訪れた。皇族では昭和11年5月に山階宮妃・久邇宮妃、昭和14年3月に高松宮宣仁親王の台臨があった。この他著名な軍人、政治家、文化人が訪れたことが、芳名録(記載数601名)から明らかになる。歌人の与謝野鉄幹・晶子夫妻、斎藤茂吉、俳人の河東碧梧桐、詩人の西條八十、植物学者の牧野富太郎、民俗学者で日銀総裁を務めた渋沢敬三、歴史学者の黒板勝美、等々。詳細は橋本達也「鹿児島高等農林学校指宿植物試験場の来訪者」(鹿児島大学研究総合博物館ニューズレターNo.29)を参照。

(丹羽)

## 地域の中の「高農」

### 運動会

明治44年(1911)以来、毎年11月に行われた高農の運動会は、一般の観客でごったがえすほどの人気の行事であった。学生は運動会の準備に精力を傾け、入口には大きな緑門(アーチ)を完成させた。競技は二百メートル走やマラソンのほか、「担架競争」「道風レース\*」「長下駄競争」など。玉利校長発案の競技が加えられたこともある。また、豚やアヒルの競技、仮装行列など数多くの余興が盛り込まれていた。尋常・高等小学生、中学校生が出る競技も用意され、地域への配慮も行われている。夕方まで競技や余興は続き、後片付けの後、学生は講堂に集合し、プログラムから、競技・余興、受付・装飾など細部にわたる玉利校長の講評を聞いたという。



13回運動会  
(鹿児島大学附属図書館)

\*道風レース……両手を前で縛った競技者が、糸につるした白汁をぬったアンパンに飛びつく競技。

\*\*仮装行列……大正13年(1924)の第十一回の折、時局に鑑みて廃止された。(丹羽)

### 博物同志会の先哲祭・野草展覧会

博物同志会は、大正6年(1917)秋、河越・岡島両教授の発案により、農学科二三年生の博物専修学生を核として設立された。例会を行う外、毎年1月下旬には「先哲祭」が開催された。これは博物学の発展に大きな貢献をした東西の先学、偉人を祭る催しで、第一回(大正7年)は江戸時代の本草学者の小野蘭山、第二回(同8年)はリンネ、第三回(同9年)は貝原益軒、第四回(同10年)はダーウィン、昭和10年のハクスレー(英国の動物学者)まで18年継続された。この他、野外採集した植物を参考品とともに展示する「野草展覧会」も開催、一般市民に成果を発表し、雑誌「博物同志会会報」(図版)を発行した。



博物同志会会報  
(鹿児島大学附属図書館)



蔬菜デー

### 蔬菜デー・蜜柑デー

蔬菜園、果樹園でできた生産物を一般市民に販売するようになったのは、大正11年(1922)の11月23日、開校記念日(新嘗祭と式典が開催された)のことと推定される。この日は吉村新校長の方針で学校の一般への開放が行われ、農場・養蚕室公開、標本展示や蔬菜やバター等の即売等が行われた。以来、蔬菜デー・蜜柑デーと称し、生産物即売は高農の名物の一つとなった。現在でも定期的に農学部附属農場・果樹園の生産物販売が行われている。(丹羽)

### 昭和6年『木脇藤次郎日記』に見える高農

木脇藤次郎(1859-1932)は玉里邸にあった玉里島津家の書籍(玉里文庫)の維持管理・目録作成に大きな役割を果たした人物として知られる。藤次郎は高等農林学校からほど近い唐湊に居住、晩年の日記(当時73歳)には高農について次の5回の記述が見える。

- 4月25日 この日は午後三時から知人の姉の一周忌法要に出られなかった詫びを言いに行った後、「高等農林学校内の前校長玉利喜造博士の告別式ニ参席」、さらに鴨池公園で開催された寺田屋事件の追悼の祭典に出席した。
- 5月6日 朝8時から薬師町に出掛け、幕末にあったという「墨所」(墨の製作所)の史実について尋ね、そこで教えられた原田房太郎の自宅へ行き、原田氏の父親が齊彬の時代に京都から筆の教師として雇われて下ったという話などを聞き取り、病中との事で長居を差控え、「ソコソコニ帰り、高農ニて花園を一覧して帰宅せり」。
- 11月3日 「今日ハ例の高農の運動會なり。」
- 11月29日 「祐之等高等農林蜜柑賣出しに行き、沢出(ママ)買入れ帰る。」祐之は藤次郎の長男。朝鮮の鉾山技師として働いていたが閉山により、この年家族を連れて実家に帰っていた。
- 12月12日 「終日在宅。午後高農第二回蔬菜デーニ祐之等一同行く。」

(丹羽)

# 鹿児島大学に残る「高農」

## 鹿児島高等農林学校図書館書庫（現、総合研究博物館常設展示室）

総合研究博物館常設展示室は、鹿大に残る唯一の高農時代からの学校建物である。当初は図書館書庫として建てられたもので、はじめ石造であったものが昭和3年(1928)に鉄筋コンクリートに建て替えられ、現在までその姿を留めている。鹿児島県における現存するもっとも古い学校施設であり、また初期鉄筋コンクリート建物としての重要性から、国の登録有形文化財に登録されている。

大正8年(1919)、創立10周年の記念式典で玉利喜造校長が10年間の成果として、図書・標本の収集を挙げている。「当校の如き専門学校に於ては他に得べからざる貴重の図書標本の多数を蔵するを以てその学校の価値を定むべし」との見解をもって、開校とともに熱心な収集がなされ、その蔵書は10年で、和漢書6,028冊・57軸・511枚、洋書2,841冊・3軸、写真93枚、雑誌97種を数えたという。

一方、標本類は動物、植物など数多くの標本収集がなされたが、その多くは昭和20年(1945)6月の鹿児島大空襲により戦火で焼失した。そのなかで被災を免れた植物標本は日本を代表するコレクションとして戦後、農学部、総合研究博物館へと受け継がれている。



鹿児島大学に残る高農

## 記念樹

大正11年(1922)、貴族院議員に任命され高農を去ることとなった玉利校長は毎年の得業記念植樹を高農の重要事業とする「記念樹規程十則」を制定した。記念樹のうち第1回記念樹(明治45年)の佐多演習林にて採取したソテツ、第2回記念樹(大正2年)のトウオガタマノキ、第12回記念樹(大正12年)のクロツグは今も現存している。第4回(大正4年)、第18回(昭和4年)は記念樹の碑だけが現存している。また、正門横にそびえ立つ銀杏は大正9年(1920)に来校した皇太子時代の昭和天皇が植樹したものである。



## 玉利喜造先生胸像



大正14年(1925)、玉利校長の功績を讃えて胸像が作られた。渋谷のハチ公や市立美術館前の西郷像の作者として知られる安藤照の制作になる当初の胸像は太平洋戦争中に供出によって失われた。現在の胸像は戦後、安藤氏の師、日本近代彫刻の代表作家、朝倉文夫が制作したものである。台座は当初からのもので、昭和20年の米軍機による機銃掃射時の弾痕が残る。



## あらた記念会館

昭和9年(1934)、開校25周年の記念事業として、池の東側に二階建ての本館(洋館)、平屋建て別館(日本館)が建てられ、「最新の意匠を凝らしたる輪奐の美」として讃えられた。昭和20年(1945)6月17日の空襲で洋館は焼失したが、日本館は残り、昭和36年(1961)に池の北側の現在位置に移設され現存している。このころ玉利池も北側が埋め立てられて小さくなった。その後、開学75周年・100周年の記念事業による記念会館の大修理・玉利池周辺庭園の整備を経て、現在の姿となっている。

### 主要参考文献一覧

- 『鹿児島高等農林学校校友会報』1号～31号 1913～1940年
- 『開学五十周年記念誌』鹿児島大学農学部 1961年
- 『城山物語』毎日新聞鹿児島支局編 謙光社 1969年
- 『郷土人系 上』南日本新聞社編 春苑堂書店 1969年
- 『玉利喜造先生伝』玉利喜造先生伝記編纂事業会 1974年
- 『鹿児島大学農学部七十年史』鹿児島大学農学部 1980年
- 『あらた七拾五年の歩み』鹿児島大学農学部あらた同窓会 1985年
- 『あらた百年の歩み』鹿児島大学農学部開学100周年記念事業実行委員会編・発行 2010年
- 鹿児島大学総合研究博物館ニューズレターNo.7、9、21、24、29

## 布久思宮跡



玉利池南側の木立のあたりには「布久思宮」とよばれた石の祠があり、祠の前、いま稲盛アカデミーが建つあたりには神前に供える米を作った「献穀田」が広がっていた。一帯は高農開校以前から「フクシ」の森と呼ばれていたとの言い伝えがある。祠の場所には現在、石組みの台座のみが残り、付近には二体の田の神像がある。うち一体(図版上)は、江戸時代からのもので、もう一体は高農の新嘗祭で奉納された田の神舞の姿を写したものである。戦中期には献穀田での田植祭や重要な行事の日に全校揃って布久思宮に参拝した。

## 植物園

開校と同時に開設された植物園はエングラーの植物分類方式による花壇式植物園として造られた。戦中・戦後の荒廃で樹木だけとなったが、補植・整備が進み、現在は南九州から琉球列島に分布する樹木を中心に、外国樹種を含め約300種が植栽されている。

## 玉利池

開校当時、高農一帯は「荒田田圃」とよばれ、見渡す限りに水田が広がり、水はけは悪く梅雨時には泥沼になるほどであった。郡元キャンパスの中央には西から東方向に弥生時代から江戸時代まで流れていた旧河川が埋没しており、玉利池はその名残で、もっとも水はけの悪かった部分が池として残ったと考えられる。高農時代の玉利池は今よりもずっと大きく、昭和初期には学生の憩いの場所となっていた。なかには北アメリカ南部湿地原産、根元が水につかった状態で育つ落羽松(ヌマスギ)という珍しい木もあった。紅葉がみごとな大木が一本、今もあらた記念会館の西側にある。

(上村・橋本)





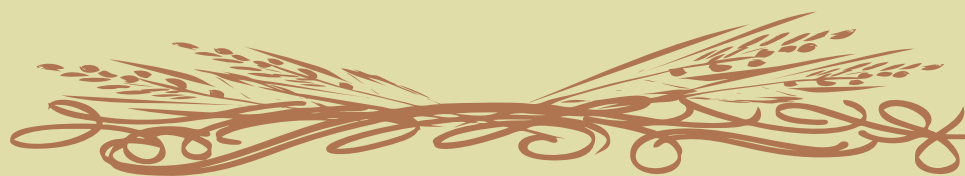
平成27年度鹿児島大学附属図書館貴重書公開  
**旧制鹿児島高等農林学校の底力**

【編者】丹羽 謙治(法文学系教授) 伊藤 正(教育学系教授)  
【執筆者】丹羽 謙治(法文学系教授) 橋本 達也(総合研究博物館准教授) 佐藤 宏之(教育学系准教授)  
鶴戸 聡(法文学系准教授) 上村 文(総合研究博物館事務補佐員)

【デザイン他】鹿児島大学附属図書館広報・イベントワーキンググループ

【発行】鹿児島大学附属図書館  
<http://www.lib.kagoshima-u.ac.jp>  
〒890-0065 鹿児島市郡元1丁目21-35 電話099-285-7435  
平成27年11月15日発行

【印刷】濱島印刷株式会社



表紙写真説明  
上 高等農林運動会の様子  
中央 高等農林実験の様子  
下 高等農林校舎等全景

